

2022年度

SG

## 小論文

3月12日(土) 地域創造学環  
【後期日程】

9 : 30 ~ 10 : 50

### 注意事項

#### 試験開始前

- 1 監督者の指示があるまで、問題冊子、解答用紙、下書き用紙に手を触れてはいけません。
- 2 監督者の指示に従って、全部の解答用紙(2枚)に受験番号を記入しなさい。

#### 試験開始後

- 3 この問題冊子は、4ページあります。はじめに、問題冊子、解答用紙、下書き用紙(1枚(表裏))を確かめ、枚数の不足や、印刷の不鮮明なもの、ページの落丁・乱丁があった場合は、手をあげて監督者に申し出なさい。
- 4 解答は、すべて解答用紙に記入しなさい。(下書き用紙と間違わないよう十分注意してください。下書き用紙は採点対象となりません。)
- 5 文字数制限のある解答用紙の記入については、下記の点に留意すること。

- ・書き出しは、一マスあけない。
- ・改行したら一マスあける。
- ・句読点は、それぞれ一マス使う。
- ・小さな文字「っ」「ゃ」「ゅ」「ょ」はそれぞれ一マスで使う。
- ・行の最後の句読点は、最後のマス目の文字と一緒に書き入れる。

- 6 問題は、声を出して読んではいけません。
- 7 配点は、比率(%)で表示してあります。

#### 試験終了後

- 8 問題冊子と下書き用紙は、必ず持ち帰りなさい。

次の文章はローゼン著『尊厳』の「訳者あとがき」である。これを読んで、後の問一から二に答えなさい。

「尊厳」という言葉を聞いて、読者は何を思い浮かべるだろうか。この言葉にはそれほど厳密な定義はないし、人権のような普遍的な法的裏づけがあるわけでもない。それでも、人間にとって大切な何かを意味することは間違いない。私たちは、人間の尊厳が議論される状況をよく知っている。それは人の生と死が問われる状況であり、人が人として生きることの条件が切実に問われる状況である。尊厳の概念は、アウシュヴィッツから生還した化学者フリーモ・レーヴィが描き出したような人間の魂の破壊と再生の物語と響き合う。

この本が出版される年は、二〇一一年の東日本大震災から一〇年目にあたる。時間が経過しても、人びとは繰り返し犠牲者に対する敬意を示すことで、死者の尊厳を保っている。当時を思い起こせば、避難所で食べ物を受け取る際に、整然と列をなしていた被災者の姿にも、人間の尊厳としか形容できないものがあつた。そして今、多数の人びとの命を奪った海を見ながら、私たちは、自然の尊厳と呼ぶべきものがありはしないかと感じることもある。こうしたすべての思いを整理できないまま、私たちは尊厳について語り続けている。

二〇二〇年、新型コロナウイルス感染症が拡大するにつれて、世界の多くの国々で、多くの死者が適切な葬儀もなく埋葬されていた。国内においても家族が、友人が、離ればなれに生きることを強いられた。夜の繁華街で騒がないといった威厳ある行動が求められる反面で、仕事を奪われ、誇りを奪われる人びとが相次ぎ、ドメスティック・バイオレンス(DV)が増加し、自殺者も増えた。コロナとともに生きる日常において「取り残された人びと」の尊厳が、厳しく問われている。

尊厳の概念は、さらに多くの領域で語られている。たとえば、人間の生命に対する人為的な操作(人工妊娠中絶、ヒト胚ゲノム編集)、自分の人生の終わらせ方(いわゆる尊厳死、終末期医療、エンディングノート)、そしてジェンダー問題、マイノリティへの差別や迫害、老人と若者それぞれが抱える問題と世代間の対立、技術革新の影響(AIと雇用、ロボットと介護、身体の一部の機械化)など、これらすべての議論において人間の尊厳の概念が援用されている。二〇一六年の相模原殺傷事件のように、障がいとともに生きているというだけの理由で施設で暮らす人びとが無差別に殺害された事件に接するとき、私たちは、権利よりも強い道徳的な理念を求めないわけにはいかない。人間の尊厳が切実に議論されるのは、そのような文脈においてである。

ある言葉が使われるのは、その言葉が必要とされているからである。私たちは、尊厳という言葉がもつ修辭的な力強さを知っている。しかし今のところ、尊厳は、そこから先の公共的な議論を促すような柔軟な概念としては、必ずしも十分に機能していないようにも見える。この言葉を持ち出すことで、それ以上の問いかけを封殺するような使われ方を目にする<sup>(1)</sup>ことさえある——一人ひとりの人間の尊厳を議論することなしに、日本国民の地位の尊厳を強調することも可能なのである。だからこそ、尊厳という言葉が使われてきた歴史を整理し、私たちの直感に思想的な根拠を与え、ときに対立的な形で尊厳の

概念が使われてきた理由を理解することによって、できるだけ多くの人びとを巻き込んだ議論を積極的に展開していくべきときが訪れているのではないだろうか。

(中略)

あらためて、尊厳とは何だろうか、と問うてみよう。広辞苑には、「とうとくおごそかで、おかしがたいこと」とある。英語の *dignity* の訳語として明治時代以降に普及したとされるが、今の私たちにはとても自然に響く。「尊」と「嚴」を組み合わせた漢字の力を感じないわけにはいかない。

とはいえ、尊厳という考え方が何を意味しているかについて、さらに厳密に語ろうとすると、わかるようでわからない。私たち自身の尊厳の理解を深めていくために、西洋における尊厳の概念の歴史と意味を知ることが有意義だろう。

本書を通じてローゼンは、「尊厳はこれだ」と断定するのではなく、西洋世界の広義の哲学史において絡みあってきた意味のより糸を、丹念に解きほぐしていく。ローゼンによれば、尊厳には三つ(ないし四つ)の構成要素があるという。それらの要素はねじれて結びつき、時代とともに摩擦を起こしたり、強固な束となったりするなかで、人びとの思考に影響を与え続けてきた。尊厳は、単独で成立する規範ではなく、いくつかの規範が結びついた複合的な規範なのである。

では、そこにはどのような要素があるのだろうか。ローゼンが第一章で述べている順番通りに整理してみよう。第一は「地位としての尊厳」である。近代の社会では、人間の尊厳が適用される範囲は今よりもずっと狭かった。社会のヒエラルキー(階層秩序)に基づいて、尊厳を有する者は聖職者や王侯貴族、地元の名士に限られていた。ところが、フランス革命を契機に、尊厳がかな者たちのサークルは下へ外へと拡大することになり、すべての人間は人間という地位を理由として平等に尊厳をもつ、という理解が定着するようになった。神聖な権威を司っていたキリスト教会も、この歴史的な変化に徐々に適応していく。ただしローゼンは、カトリック思想においては長らく、地上と天上のすべての構成員が、それぞれに適切な地位を占める限りにおいて(異なる種類の)尊厳をもつ、という考え方が支配的であったことを指摘し、読者の注意を促している。

第二は「本質としての尊厳」である。尊厳をそなえる者の拡大と並行して、ドイツの哲学者イマヌエル・カントは、人間が尊厳、すなわち内在的で無条件的で比較できない価値をもつというのは、どういうことかを追求した。カントにとって、尊厳の根拠となるのは自律である。ただし、カントにとって自律は、人は自分の生き方を自由に決めてよいという現代的な理解とは異なり、道徳法に従って生きることを意味する。この道徳法は人間が自らに与えるものであり(自らを律する)、それができるのは人間のみである。こうしてカントは、人間以外のものを尊厳の対象から除外するかわりに、人間なら誰しも道徳法をつくる能力をそなえているというところから、すべての人びとが人間の本質として平等に尊厳を有していると理解する道を拓いた。だがローゼンは、このようなカント的な尊厳の理解の説明にとどまらず、当時のカント自身の尊厳観にはここで挙げた第二の要素以外のアプローチ(とりわけ、次に見る態

度としての尊厳も含まれていたことを指摘する。

第三は「態度としての尊厳」である。この尊厳の理解を代表する思想家として、ローゼンは、フリードリヒ・シラーを挙げる。シラーは尊厳を「苦しみの中の静けさ」という言葉で表現し、地位でも本質でもなく、人間の振る舞いのなかに尊厳を見いだそうとする。周囲からの罵詈雑言に対して毅然とした態度をとったり、苦痛を受けて泣き叫ぶことを堪えたりすることは、容易ではないけれども、そう振る舞おうとすることは誰にでも可能である。こうしてシラーは、カントとは別の視角から平等な人間の尊厳を構想した。この立場では、逆境にあつても自制心を失わず、落ち着いた態度を維持することで、人は尊厳を保つことになる。この意味での尊厳が問われる究極の場面は、人が死を迎えるときかもしれない。

ここで尊厳の第四の要素が導かれるが、それは第三の要素から派生的に生じたものと位置づけられる。態度としての尊厳は、自らの威厳ある振る舞いに焦点を当てるものであつた。しかるに第四の要素では、他者の尊厳に対して人はどのような態度をとるべきかが問題になる。ここでのローゼンのキーワードは、敬意(respect)である——尊重や尊敬という訳語を使うと「地位の尊厳」に引きずられてしまうので、本書では「敬意」ないし「敬い」と訳している(なお、日本の仏教では、聖徳太子の時代から「法を敬う」という言い方をする)。自分の内なる尊厳とは異なり、他者の尊厳を重んじる行為は何らかのコミュニケーションを伴う。そこで重要になるのが、「敬意の表現」である。困難な経験のさなかにある他者と対面するとき、<sup>②</sup>他者の尊厳が私たちに適切な敬意の表現を求めるのである。

あらためて尊厳の定義に戻ると、広辞苑の定義は簡潔的を射ていると思う。尊厳とは、尊く(第一の要素)、厳かで(第三の要素)、不可侵である(第二の要素)(ことを指すのである。これらのすべてが重なり合うところに、尊厳の意味が立体的に浮かび上がる。そして、このように複合的に定義された尊厳に敬意を表すところにおいて、尊厳の第四の意味が生まれるわけである。

【マイケル・ローゼン著、内尾太一・峯陽一訳『尊厳—その歴史と意味』岩波書店、二〇二二年、「訳者あとがき」より。  
なお、出題の都合上、原文の一部を省略・改変している。】

問一 傍線部①「一人ひとりの人間の尊厳を議論することなしに、日本国民の地位の尊厳を強調する」とはどのようなことか。具体例を挙げながら、三〇〇字以内でその意味を説明しなさい。なお、その際、本文中に登場する、第一の要素「地位としての尊厳」、第二の要素「本質としての尊厳」、第三の要素「態度としての尊厳」、第四の要素「他者の尊厳に対する敬意」という語句のいくつかを適切に用いて説明すること。(三五%)

問二 傍線部②「他者の尊厳が私たちに適切な敬意の表現を求める」という一文の趣旨はどのように解すればよいだろうか。あなたの考えを六〇〇字以内で述べなさい。その際、必ず、①傍線部中の「尊厳」の意味を説明し、かつ、②「敬意の表現」とはどのような態度や行為を指すのか具体例を挙げて説明すること。(六五%)